

## 二つの蛇神様に見守られた集落「徳沢」

「蛇は嫌いだ」という人がほとんどかもしれませんが、蛇のお話です。

蛇はその形から古来より恐れられ、神聖な動物として崇められてきました。全国的に祖霊、水神、山の神、田の神として祀られています。徳沢地区には、集落の東西の端にそれぞれ蛇神様が鎮座しています。東端、上の蛇神様は会津の中で特に有名で、江戸時代に会津藩によって編さんされた『新編会津風土記』には「蛇石、村の東約60間（約109<sup>間</sup>）にあり高さ3尺（約90センチメートル）、幅5尺（約1.5<sup>間</sup>）ほどの黒色の石なり。



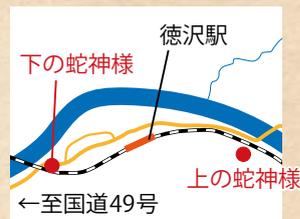
↑東端に祀られている「上の蛇神様」

中ほどに断裂せし所あり、中は空虚にして常に数多の小蛇住し。時ありて多く頭を出すことあり。斯<sup>かか</sup>る時三日を出ずして必ず雨降ると云う」と書かれています。西端、下の蛇神様は高さ約2<sup>間</sup>ほどの岩で、木立の中にあります。「岩の割れ目や岩の近くで蛇を見ることがある」という話ですが、蛇の頭部や尻尾、ウロコに似た岩や植物のある場所や、蛇がとぐろを巻いているような形の山全体が蛇神様として祀られているようです。



↑西端「下の蛇神様」

江戸時代、徳沢は越後街道から外れた地でしたが、荷の一部が集落で扱われていた記録も残っています。明治に入り、三島通庸<sup>みちつね</sup>による「三方道路」建設では、一時期車峠が廃されて、徳沢のすぐ近くの東南の山中に「小出峠」が掘削され、銚子ノ口の河岸を通り宝川に至る街道が敷かれました。大正になり、現在の磐越西線が全線開通すると、徳沢駅は奥川・宝川の人や物資のターミナルとしてにぎわいました。今は「蛇神様」に見守られた静かな集落です。



### 今月の表紙

今月の表紙は、西会津小入学式から。入学児童を代表して安部静那<sup>しずな</sup>さんが岡崎秀明校長からうれしそうに教科書を受け取りました。

※6ページに関連記事

### 編集後記

最近読んだ登山の漫画に影響され、「久しぶりに山に行きたいなあ」なんて考えている今日この頃。昨年、買ったはいいものの開けてすらいないテント（なんと1500円！）を今年こそは使って、山でのテント泊をしてみたいともくろんでいます。

しかし、5月は今年もイベントが盛りだくさん。「菜の花まつり」「大山ウオーク」なつかし「carショー」、そういえば山開きイベントもあります。この合間を縫って行けるのか、あるいは山開きの取材で満足してしまうのか。あの意味自分への挑戦です。

おそく取材で満足 長谷川祐一